中国東北地方(旧満州)における日本語新聞

満州日報・満州日日新聞マイクロ版

1906▶1944

全332リール

35ミリ・マイクロフィルム

セット特価 **¥4,482,000** (リール単価¥13,500)
分売(年度毎)購入の場合　リール単価¥15,000

※表記の価格は本体のみ

日露戦争直後、中島真雄が営口、そして奉天で発行した「満洲日報」とともに、国策遂行機関としての南満洲鉄道株式会社が、その機関紙として発行したいわゆる「満日」が、マイクロフィルム全332リールに収録されています。中国東北地方を巡って展開された日・露・中・米国間の約40年間におよぶ応酬の歴史が一日刻みで記録されています。

(南満洲鉄道株式会社　本社)

収録対象紙 (欠落一部あり)
満洲日報 (営口 中島真雄発刊) 1906年1月1日より1907年10月17日
満洲日報 (奉天 中島真雄発刊) 1908年3月2日より1908年4月14日
満洲日日新聞 (大連 満鉄発刊) 1907年11月3日より1927年10月31日
満洲日報 (大連 満鉄発刊) 1927年11月1日より1935年8月7日
満洲日日新聞 (大連 満鉄発刊) 1935年8月7日より1944年3月31日

発行元：中国経済発展研究所　発売元：丸善株式会社

推薦のことば

京都大学人文科学研究所助教授
山　室　信　一

新聞はその社会の毎日のでき事を巨細に映し出す鏡であり、日誌である。そのため、ある社会の日々の相貌と推移をたどろうとする時、新聞は不可欠の資料となる。とりわけ、中国東北地方(旧満洲)に関しては、満洲国の評価もからんで、戦後に出された談話や文章からは実像が捉えがたい面があるため、新聞のもつ史料的価値はきわめて高いものとなり、その活用が望まれてきた。

しかし、新聞は一日だけの大ベストセラーといわれるように、その日に有用でも翌日には不要ともなるだけに持続的に残されることはきわめて稀であり、まして外国で発行された新聞を収集することには多大な困難が伴う。

その意味で、このたび40年にも及ぶ長い時間の幅で中国東北地方における日本語新聞が系統的にマイクロフィルム化されることは驚異的で瞠目すべき事業である。これによって、日本人が満洲という地域をいかに意識として獲得していったか、そしてその地でいかなる政治的・経済的活動を繰り広げていたか、などの真相が明らかにされていくであろう。

しかし、個人的な関心でいえば、満洲で発行された新聞の紙面の面白さは、社会面や広告欄などによって満州で暮らした日本人の日常そして内地とのつながりなどが鮮明に浮かび上がる点にこそある。そうした日常の生活史を含みつつ、日本人にとって満洲とは、あるいは植民地とは何であったか、を総体として描き出す作業に貴重な基礎を与えるものとして、今回のマイクロ化は満洲研究のみならず日本植民地研究にも画期的意義をもつものと確信し、強く推奨したい。

アジア経済研究所
井　村　哲　郎

日露戦争の結果日本が満洲に獲得した植民地である関東洲と南満洲鉄道株式会社(満鉄)付属地に日本人が増えるにしたがって邦字紙が発行されるようになる。明治38年には営口に『満洲日報』が発刊されたが、翌年軍政署の撤退とともに半年で廃刊されたという。大連でも同年『遼東新報』が発刊され、他都市でも次第に邦字紙が発行されだす。

満鉄は会社事業の広報のために『社報』を社員向けに発行していたが、満洲に居住する日本人の増加に伴って、明治40年『満洲日日新聞』を創刊した。「満洲ノ開発ニ資スルト同時ニ会社事業ノ機関タラシムル目的」であったとされる。当初は満鉄の直営新聞であったが、大正2年株式会社組織に変更、その後大正8年には満鉄が全株を取得している。その後紙名や発行所に変遷はあるが、満洲の代表的な新聞となった。こうした経緯でも明らかなように、満鉄と満洲の新聞との関係は非常に密接なものであった。満洲日日新聞社は、大連の満鉄本社前に、満鉄大連図書館、満鉄調査部と並んであり、3階建ての社屋を有していた(現在は改装されて大連日報社の社屋として使用されている)。

昭和6年の「満洲事変」さらに「満洲国」が作られてから満洲でのさまざまの動きを報道する新聞の役割も大きなものとなる。戦前の新聞は地方紙が多かったこともあり、満洲における日本人の活動を研究する際だけでなく、満洲をめぐる日中関係、中国側の動向の研究には、満洲現地で刊行された新聞は欠かせない資料であるが、これまで利用には制約が多かった。この満洲の新聞のマイクロフィルム版は、中国東北近現代史研究のために必須のものとなろう。

慶應義塾大学経済学部助教授
柳　沢　　遊

旧「満洲」(中国東北部) における日本人企業の営業活動や日本人の生活、中国人と日本人とのかかわりあいを知るうえで、『満洲日日新聞』などの日本語新聞は、満鉄の発行した雑誌などとともにこれまで重要な役割を果たしてきた。たとえば、大連、奉天 (現瀋陽)、長春などの日本人商店の動向、満鉄の人事、「排日」諸事件、中国側諸団体の動向から、スポーツ、娯楽、文芸、商品広告に至るまで、『満洲日日新聞』は、1910～20年代の在満日本人社会史・経済史・文化史の実証研究の上で他の資料では代替不可能な興味深い資料を私達に提供してくれている。これまでも、国立国会図書館 (マイクロフィルム) や東京大学社会情報研究所 (現物) において、『満洲日日新聞』を部分的に閲覧することは可能であったが、日露戦争後の『満洲日報』や初期の『満洲日日新聞』、さらに太平洋戦争期の『満洲日日新聞』については、その大半が日本国内に所在していなかったために閲覧することができなかった。このたび、中国諸都市の図書館に散在している日本語新聞が系統的に収集・マイクロフィルム化されることにより、はじめて、日本支配時代のほぼ全期間にわたって日本語新聞を閲覧できるようになったことは、在満日本人社会史研究の進展にとってきわめて大きな意義をもつといえよう。

『満州日報』マイクロフィルム構成一覧

（記載の他にも夕刊、朝刊、市内版、第二版、A・B・C・D版などの欠落もしくは紙面の部分的欠落あり）

1) 満州日報(出版地、営口・中島真雄発刊・発行期間：1905年7月26日～1908年10月・原紙サイズ39cm×55cm)、収録期間：1906年1月1日号～1907年10月16日号					
年　度	収録リール番号(巻)	リール数	欠　号　部　分	欠号数	備　　考
1906 (M.39)	第1～3リール	3	6月9日、8月26.29.30.31日、11月2.17日、12月28.29日	9日分 9号	創刊号1905.7.26・～12.31欠
1907	第3～6リール	4	1月8日、2月9.10.13.16.17.18.19.21日、5月11.12.23.25.29～31日、6月11.18日、8月8日	19日分	1907年10月17日号が最後の号10月に廃刊
2) 満州日報(出版地、奉天・中島真雄発刊・発行期間：1907年12月5日～1908年4月・原紙サイズ39cm×55cm)、収録期間：1908年3月2日～4月14日					
年　度	収録リール番号(巻)	リール数	欠　号　部　分	欠号数	備　　考
1908 (M.41)	第6リール	1	創刊号より1908年3月2日号迄、3月5.28日	約3ヵ月分	営口満日の創刊者が創刊
3) 満州日報(出版地、大連・南満州鉄道㈱発刊・原紙サイズ39cm×55cm)、収録期間：1927年11月1日～1935年8月7日					
年　度	収録リール番号(巻)	リール数	欠　号　部　分	欠号数	備　　考
1927 (S.2)	第6～8リール	3			満日と遼東新報併合後の新聞
1928	第8～19リール	12	4月30日、5月1.2日、6月5.6.28日	6日分	
1929	第19～32リール	14			
1930	第32～45リール	14	5月1日	1日分	
1931	第45～55リール	11			満州事変の時期の新聞
1932	第55～69リール	15			
1933	第69～83リール	15	12月31日	1日分	
1934	第83～98リール	16			
1935	第99～108リール	10			3月16日からa.b.c.d版が登場

『満州日日新聞』 マイクロフィルム構成一覧 〔記載の他にも夕刊、朝刊、市内版、第二版、A・B・C・D版などの欠落もしくは紙面の部分的欠落あり〕

1) 満州日日新聞（出版地、大連・南満州鉄道㈱発行・原紙サイズ39cm×55cm）、
収録期間：1907年11月 3 日～1927年10月31日

年　度	収録リール番号（巻）	リール数	欠　号　部　分	欠号数	備　　考
1907（M.40）	第1リール	1			創刊号64頁に及ぶ
1908	第1～9リール	9			
1909	第9～16リール	8			
1910	第17～25リール	9			
1911	第25～33リール	9			
1912	第33～40リール	8			
1913	第40～48リール	9			
1914	第48～56リール	9			
1915	第56～63リール	8			
1916	第63～71リール	9	7月31日		
1917	第71～77リール	7	1月23日 5月1日～7月31日 12月1～31日	4ヵ月と1日分	
1918	空白			1年分	
1919	第77リール	1	1月1日～5月31日 7月1日～12月31日	11ヵ月分	
1920	第77～80リール	4	1月1～31日、4月1日～5月31日、7月の全部、10月の全部	5ヵ月分	
1921	第80～85リール	6			
1922	第85～90リール	6	5月17日、6月13.30.31日	4日分	
1923	第90～95リール	6	1月1～3日、5月25日、6月11.12日、10月19.20.22.23.24.30日、11月1.2.17日	15日分	
1924	第95～101リール	7	5月18日	1日分	
1925	第101～107リール	7	7月17.23.24.26日、8月3.9日、9月1～30日	6日分と1ヵ月	
1926	第107～114リール	8	11月1日	1日分	
1927	第114～119リール	6			

2) 満州日日新聞（同上新聞）、
収録期間：1935年 8 月 7 日～1944年 3 月31日（1927年から1935年の間は満州日報）

1935	第120～126リール	7			8月7日大連新聞を併合し発行
1936	第126～144リール	19			昭和13年より奉天で発行
1937	第144～163リール	20			
1938	第163～182リール	20			
1939	第182～198リール	17			
1940	第198～208リール	11	7月1日、8月8.23日、12月30日	4日分	
1941	第209～213リール	5	2月10日、3月24日、5月16.28日、7月14日、8月26日、9月1日、11月23日	8日分	
1942	第214～220リール	7			12月10日よりa.b.c.dの版面が第1.2.3のように変わる
1943	第220～224リール	5	4月5.6日、5月1～3.9日、6月1.9.22.26日、7月4日、8月25日、10月1日、11月5.6日、12月24～31日	23日分	
1944	第224リール	1	1月11.21.30.31日 4月1日以降なし	4日分	4月以降「満州新聞」と合併、満州日報の題の新聞発行

MARUZEN
丸善株式会社 ［学術情報ソリューション事業部　企画開発センター］
〒105-0022 東京都港区海岸 1－9－18 国際浜松町ビル 7F
TEL 03-6367-6078　FAX 03-6367-6184　http://www.maruzen.co.jp/
営業部・支店・営業所＝横浜・八王子・大宮・筑波／札幌・盛岡・仙台・名古屋・岐阜・金沢・京都・大阪・神戸・岡山・松山・広島・福岡・長崎・熊本・沖縄／ニュージャージー